

障害の重い子どもと係わり合うなかにある実践研究

—教育実践研究のあり方をめぐって—

企画者・話題提供者	岡澤 慎一（宇都宮大学）
司会者・話題提供者	中村 保和（群馬大学）
話題提供者	菅井 裕行（宮城教育大学）
	笹原 未来（福井大学）
指定討論者	土谷 良巳（上越教育大学）

KEY WORDS: 障害の重い子ども、係わり合い、実践研究

【企画趣旨】

わが国における障害の重い子どもの教育は、1949 年からの山梨県立盲学校における盲ろう教育から始まる。その後、全国で感覚障害と他の障害を併せ有する盲重複障害、ろう重複障害のある子どもへの教育実践が行なわれた。1979 年には養護学校教育義務制が実施され、重度・重複障害児への学校教育が法的に整備された。近年は、重度の肢体不自由があり、継続的で濃厚な医療的ケアを必要とする超重症児への教育のあり方が課題になっている。この間、障害の重い子どもの状態像の変遷のなか、内容や方法を含めた教育の実践とその研究のあり方が問われ続けてきた。

障害の重い子どもに限らず、教育は子どもと係わり手とが出会い、係わり合いを重ね、そこに何らかの学習が実現する営みと考える。学習は子どもにおいても係わり手においても実現する。人は学習することで何かが変わり、子どもと係わり手とが双方向的に変化を重ね合っていくことが教育的係わり合い（梅津、1974）の過程であろう。また、子どもが学習することからは、係わり手が事前に意図したものもあればそうではないものもある。いずれにしても、教育が子どもと係わり手との係わり合いを抜きにしては実現しないものであるならば、教育実践研究における研究の主体は係わり手自身であるべきであろう。

わが国の障害の重い子どもの教育においては、その初期には個別性に基づいた実践研究が数多く行なわれ、数々の教育実践の視点が見出されてきた。これらの視点は、障害の重い子どもとの教育実践において継承されてきている。個別性に基づいた実践研究は係わり手自身が研究の主体となつて行なわれ、係わり手の多くは大学や当時の国立特殊教育総合研究所重複障害教育研究部に所属する研究者であった。障害の重い子どもの教育において、教育実践研究を標榜するからには、研究者が現に係わり手（実践者）であることが必須である。また、子どもと対面相触（梅津、1974）の係わり合いをもつ実践から研究が志向されるともいえる。

そこで、本シンポジウムにおいては、係わり手自身が研究の主体となつて行なう障害の重い子どもとの実践研究について、その実際を、各話題提供者が取り組んできた実践における障害の状態に焦点を絞って提示するとともにこうした研究の現代的意義や今後の展望について検討する。

【話題提供者の趣旨】

話題提供 1 盲ろうのある子どもとの係わり合いから（中村）：先天性風疹症候群による盲ろう児 V（14 歳、左目光覚程度、右目 0.1、90dB 以上の感音難聴）は、主に指文字（五十音式）と手話単語を組み合わせて日常生活動作を中心とした身の周りの出来事についてのコミュニケーションが可能であるものの、繰り返される身体揺らしや定型的な手遊びにより活動の範囲やレパートリーは限定的であった。本報告においては、こうした V との対話の成立と展開にお

ける 1) 子どもの生活史（ライフストーリー）の把握、2) その生活史を子どもとともにつくること、3) 子どもと活動を共にすることから共有経験をつくることの重要性について述べる。

話題提供 2 感覚重複障害のある子どもとの係わり合いから（菅井）：聴覚支援学校重複学級に通う U と、就学の時期から主に数とことばの学習を中心に係わり合いを行ってきた。課題学習を進めるにあたって、必要となるコミュニケーションは、単に身振りや手話単語の了解だけで成立するのではなく、係わり（経験）の積み重ねと相互の読み取り合いが必要であった。「課題学習」であっても係わり合いは、課題の提示と実行の繰り返しではなく、子どもの自発への対応や共同活動が生み出す質的な変化が織り込まれて進行する。そこでは係わり手の方針や見解の修正、組み直しが必要である。このような展開過程を考察する。

話題提供 3 重度知的障害のある子どもとの係わり合いから（笹原）：歩行による事物への接近は可能であるもののリーチングや事物操作が難しい S さん（レット症候群）との係わり合いにおいては、S さんがタワー状になったブロック玩具を倒すという活動が成立・展開した。こうした活動は、S さんの振る舞いから S さんの興味関心を捉えること、また S さんの行動の意味をその場の文脈に照らし合わせて解釈し、活動を提案すること、S さんの振る舞いから提案に対する S さんの諾否を読み取り S さんの興味関心や行動の意味を捉え直すこと、そうした循環の中で形作られたものであった。本報告ではそうした係わり合いの過程を検討する。

話題提供 4 重症心身障害のある子どもとの係わり合いから（岡澤）：重度の肢体不自由があり、継続的で濃厚な医療的ケアを必要とする S さん（S）との係わり合いは、係わり手（A）の手の甲に重ねた S の手・腕の視認できない微弱な表出を A が見出し、意味解釈を重ねることから展開した。手・腕の動きは次第に拡大し、その意味を共有するに至る。S の手・腕や視線の動き、笑顔の表出と周囲の状況変化との関連をみれば、こうした活動は共同的であった。また、手・腕の動きの拡大経過は、S の表出につづさに対応する A との相互調整から S が自身の手の動きを自発的に発現し調節する自己調整に至る過程とみることができる。

【指定討論者の趣旨】

土谷：障害の重い子どもと係わり合うということはどのような実践の文脈の中にあるのか。話題提供者による実践を腑分けするとともに、範例として共有するために、その再構築を成り立たせる諸条件を抽出することこそが実践研究に他ならないことを述べる。

【付記】事例は仮名で、発表について関係者の承諾を得ている。（OKAZAWA Shinichi, NAKAMURA Yasukazu, SUGAI Hiroyuki, SASAHARA Miku, TSUCHIYA Yoshimi）